

チッチゼミ鳴く木の下で

皿海達哉

絵 長尾みのる



ビミ鳴く木の下で

皿海達哉

絵 長尾みのる



913

皿 海 達 哉

チッチゼミ鳴く木の下で

講談社 1976

158p 22cm

(児童文学創作シリーズ)

さらがい たつや

チッチゼミ鳴く木の下で

昭和51年 9 月 6 日 第 1 刷発行

昭和53年10月25日 第 3 刷発行

定 価 850円

著 者 皿海達哉
さらがい たつや

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 郵便番号112

電話 東京03(945)1111(大代表)

振替 東京8-3930

製 版 株式会社 まゆら美研

印刷所 豊国オフセット株式会社

双美印刷株式会社

製本所 株式会社 黒岩大光堂

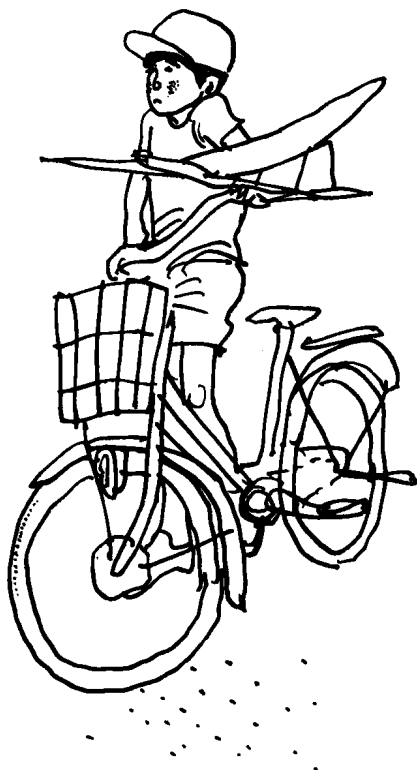
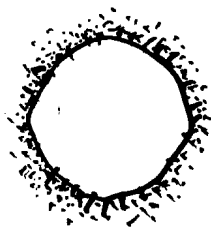
© 皿海達哉 1976 Printed in Japan

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

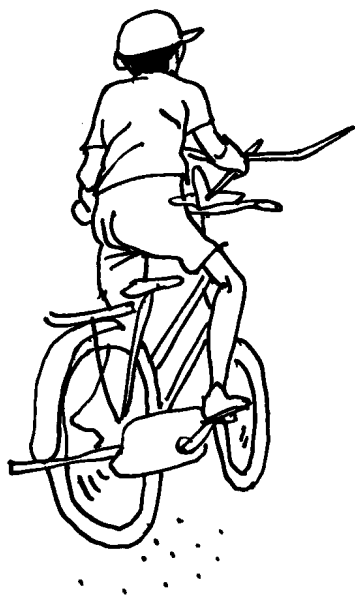
8093-189367-2253 (0)

(児一)

チツチゼミ鳴く木の下で



も
く
じ



5

グライダー……………57

4

全校登校日……………45

3

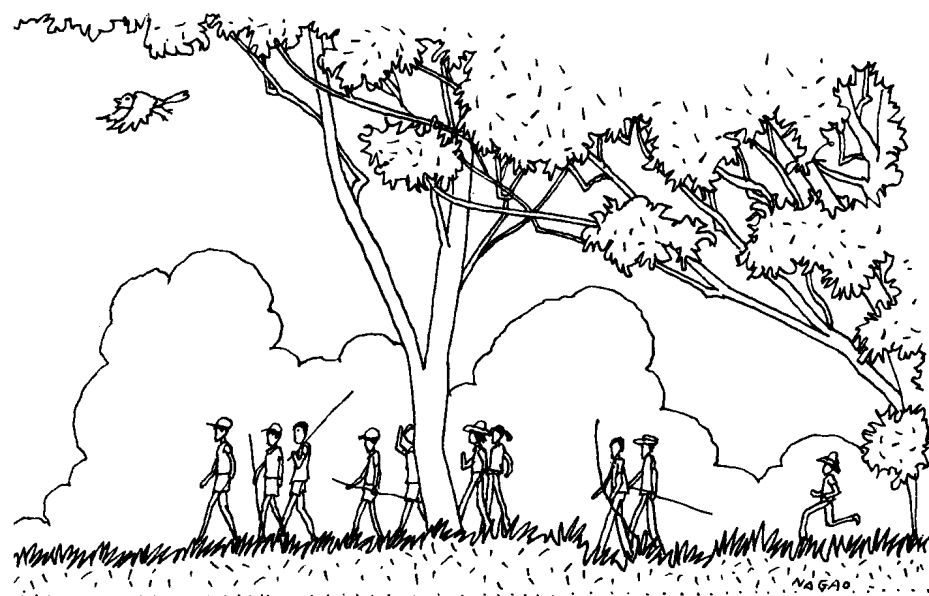
小包のおくりもの……………30

2

ソシオグラムⅡテスト……………21

1

郵便ごっこ……………6



6

給食当番……69

7

チツチゼミ狩り……78

8

チツチゼミ鳴く木の下で……113

9

別れ……149

著者紹介……158



1 郵便ごっこ

井上進は、四年の二学期に、はじめて手紙を書いた。郵便のしくみについては、もう二年のときおそわっていた。しかし、じっさいに「郵便ごっこ」というかたちをとって、たがいに手紙をやりとりしたのは、こんどがはじめてだった。

その日は、台風が近づいたとかで、ずいぶん風がよかった。まどをあけると、ノートがめくれたり、えんぴつがころがったりした。

みんなは、それをおもしろがったが、まどをしめないわけにはいかないし、しめたらしめたでとてもあつくるしく、授業にうちこむことができなかった。



担任の佐野先生は、はんぶんしかたなく、その「郵便ごっこ」をやらせたのではないかと、進は思う。

教室のまんなかに、つくえをあつめてこしらえた郵便局があつた。ダンボールばこを利用したポストが、先生のつくえの上と、うしろのごみばこの上とに、二つおいてあつた。

「郵便ごっこといっても、遊びじゃないんですから、かならずだれか一人をえらんで、まじめに書かなくちゃいけませんよ……。」

佐野先生は、白いブラウスのむねの下にうでをくんで、みんなのあいだを歩きながら、そういつていた。

「よう、カツチン。おれ、おまえに書くからな！」

「おっし。おれも、おまえにだす、だす……。」

教室のはしとはしとでよびかけあうものもいた。

進は、あたえられたびんせんがわりのわら半紙をまえにし、えんぴつを手にしたまま、どきどきしていた。自分がだれかに書くのはいい。しかし、だれから自分に手紙がくるだろうか。

進は、それが心配だった。

(もしかすると、金井くんが書いてくれるかもしれない……。)

進は、そう思った。

金井一郎は、進のすぐ右どりの席にすわっている。金井一郎がけしゴムをわすれたとき、進は、こころよく自分のをかしてやったし、教科書をわすれたときには、つくえをくつつけて見せてやった。

金井一郎は、進に見られまいとしてか、左うでを大きなかこいにして書いている。

進が、目をほそくし、考えるふりをしながらのぞいてみると、その相手は、進ではなく、厚沢春子なのだった。

(なんだ、そうか……。)

進はがっかりした。そしてまわりを見ると、ほかのものも、おおぜいが手をかこいにして書いている。きつと、男は女に、女は男に書いているのだろう。

進は、さて自分はだれにだそうか、と考えた。みんながだしそんな厚沢春子や飯田めぐみにだすのもしゃくだし、金井一郎にだすのは、もっとししゃくだ。

ところが、いざ書こうとすると、相手が一人も思いうかんでこない。進のひたいに、あせがにじんできた。

時間がたった。

みんなは、むちゆうで書いている。まどがカタカタ鳴り、風の音がビュツビュビュツとふきすぎてゆく。えんぴつをはしらせる音やわら半紙をたたむ音が、それにまじる。

進は、いらいらしてきた。これではいけないとあせればあせるほど、相手はきまらないし、書きたいこともうかんでこない。

（ああ、だめだ……。）

進が絶望的な気持ちになって、いすの背にもたれかかったとき、ふと、まどぎわのまえから二ばんめの席で、やはりぼんやりといすの背にもたれかかり、まどの外をながめている黒江くんのがたが、目にはいつてきた。

（黒江くん、もう書きおわったんだろうか……。）

あつくなつた頭のかたすみで、進はそう思った。

まどの外は、よく晴れていて、目にしみるような青空がひろがっていた。しかし、風はますますつよくなるようで、白い雲がはい色のはらを見せながら、うずまくように西にはしりはじめていた。その空の下を、紙くずや木の葉が、まるでふざけあっているみたいに、きりもみしながら

飛んでゆく。遠くの商店街は、すなほこりではうつかすんでいる。

黒江くんは、進のほうに顔の左半分を見せ、そういったまどの外のようなすを見つづけているのだった。ころもちあげたあごが、いかにもよわわしく、首すじも、こんなにほそくていいのだろうかと思えるほどほそかった。

黒江くんのほかに、ときどき顔をあげ、まどの外を見ながら文を考えているものはいた。しかし、黒江くんのばあいは、それらとはだいぶん感じがちがった。黒江くんは、みんなとおなじ教室のなかにいるのに、まるでみんなからぼつんと一人だけはなれているように、外を見つづけていたのだ。

（そうだ！ 黒江くん！、黒江くん！、黒江くん！、きつと、びつくりするぞ……！）
進は、そう思いついた。ほつとすると同時に、ふふふと、わらいがこみあげてきた。

黒江くん——黒江昌一くんは、進たちの学校、広島県芦品郡芦原町立芦原小学校の校長先生のむすこだった。

黒江くんは、ふつうの男だった。すこし体育がにがてで、とりわけ鉄ぼうがでできなかったが、それ以外にみんなとちがうところはなかった。だが、みんなは、黒江くんを敬遠していた。校長



先生のむすこだからおべんちゃらしている、と思われるのがいやだったのだ。

黒江くんは、だから、しぜん、みんなからはなれて一人でいることが多かったし、遊びもあまりせず、図書館で本をよんだりしていることのほうが多かった。

そんな黒江くんに、手紙をだしてやりそうなものが、一人でもいただろうか――。

(ふふ……おもしろいぞ。黒江くん、きつとびっくりするぞ……。)

進は、自分にくる手紙があるかどうかの心配もわすれ、その思いつきにむちゅうになった。

なにも知らない黒江くんは、まだぼうつとして、まどの外を見ながら、耳のうしろをかいている。

こんにちは、黒江くん。

ぼくからの手紙を見て、きつときみは、びっくりしたことでしょう。

進は、いさんで書きはじめた。女の子あてでもないのに、いつのまにか、左うでで大きなかこいをこしらえていた。

「須藤くん、手紙をくばるとき、差出人がだれか見ちゃだめよ！」

「差出人の名まえなんか見なくたって、おもての字を見りゃ、だれが書いたか、すぐわかつちゃうさ。」

「あら、やあだ。そんなのずるいわよ！」

「そうだ！ あて名も、あたしの名まえも、みんなローマ字で書いちゃおうっと。」

しずかだった教室のなかで、さわがしくなってきた。須藤というのは、手紙をあつめてくばる係になった男である。自分はどう書きあげたものだから、ばかみたいにはしゃいでいる。女の子たちも、それにつられてさわいでいるのだが、スズメのような女の子のおしゃべりは、考える力をなくしてしまう。

—— こんにちは、黒江くん。

ぼくからの手紙を見て、きつときみは、びっくりしたことでしょう。

進は、そこまでを、何度もうりかえしよんだ。そして、「きつ」ということを、「さぞかし」ということばにあらためた。ところが、そのあとがどうしてもつづかない。

（おかしいな……。黒江くんとは、三年のときからずっとおなじクラスなのに、なんにも書くことがうかんでこない……。なぜだろう。なぜなんだろう……。）

進は、あせった。

「あと十分。手紙は、あと十分で書きあげてください。時間はまだじゅうぶんありますから、あわてないでいいです。もう書きあげてしまった人は、書きまちはいいはないか、書きおとしたことはないか、もういつべんよくよくよみかえして、なおしてください。」

佐野先生が、進のすぐ右なめうしろで、そういつた。進は、思わずわら半紙を手でおおい、顔を赤くした。

（ほかの子にかえようか……？）

進は、そう思ったが、もうおそすぎた。

進は、目をつむり、左手でひたいをささえ、黒江くんのことを思いだそうと、必死になった。

進の友人たちは、ふだん黒江くんをあまり相手にしなくせに、けんかをやめさせるときには、いつも黒江くんを利用した。だれかとだれかが、本気になってけんかし、なかなかやめないで、鼻血がでてもなくりあっているとする。そういうばあい、だれがいちばんに考えついたのかしらないが、黒江くんをつれてきて、「やめろ。」といわせるのだ。

黒江くんが、その役目をよろこんでいたかどうか、進は知らない。でも、黒江くんは、いつもこまったような顔つきで、